

総合学習研究グループ

徳井 輝雄 田中 裕巳

総合学習の実践よりみた、学力とその評価

徳井 輝雄

【抄録】 総合学習の授業実践より得た学力観とその評価方法について述べる。総合学習は、生徒が、各教科の授業で得られた知識をある課題に向けて総合的に発揮する力を育てようとするものである。ここで得られる学力は、自分で見つけたある課題の解決に向けて、既存の知識や新しい情報を集め、自分なりの考えを纏め発表する力である。此の力は現代の情報化社会が要求している基礎学力でもある。

【キーワード】 情報化時代の学力 総合的評価 総合学習

I 現代が要請する学力はどんなものか

現在まだ主流を為す暗記型詰め込み教育は、明治の富国強兵時代から昭和の高度経済成長時代までの、西洋先進諸国に追い付く事が目的であった時期に採られた教育であった。現在の日本がおかれた状況は、この暗記型詰め込み教育ではやって行けなくなっている。科学技術・国際政治経済・環境問題・平和問題等の分野を見ると、次の世界を担う若者達には、広い視野に立った様々な知識を基にして国際的民主主義のもとで諸課題を総合的かつ独創的に解決していく能力が必要になる。従って次代を担う若者の教育は、暗記型詰め込み教育を主流にするのではなく、問題解決型主体性育成の教育を主流にしなくては行けない。しかし中学生や普通科高校生に通俗社会が要請する学力は、入試問題を解く能力である。この能力を付けさえすれば他の力があまりなくとも、それほど非難されることはないのが現状である。

高等学校を卒業するにさいして生徒が身に付けて欲しい基礎学力とは何だろうか。普通高校においては、基礎学力とは大学入試問題を解くための物とされている。基礎学力とは何かと言う学力論をここで展開する気はないが、記号操作、いわゆる読み書き算盤の能力はその中に含まれることはだれしも認めるところ

である。前述の経済問題や環境問題などを国際的平和的に解決する為の基礎能力と入試問題を解く基礎能力とは読み書きそろばんのレベルでは重なることはいうまでもない。ここで問題にしたいのは、象徴的に言えば基礎学力の向上の為に、更に難しい入試問題に挑ませるのか、高校生の程度にふさわしいテーマの下で、今まで学んできた個別的知識技能を総合する事に挑ませるのかが問われている。入試問題を解く基礎学力も無いのにそれらを総合する能力など付くはずはないという俗論が存在する。より難しい入試問題に挑むという動機付けでは指導しきれなかった部分に対し、学習者の主体性を発揮させる動機づけとして総合的知識を要求する課題に挑ませるよう指導をすることは大いに意味のあるところである。自由研究・野外学習・研究旅行・講演会などで実際問題の提示をすることは基礎的学力の獲得への強い動機付けの一つである。

II 総合学習の目指す学力

総合学習の目指す学力は単に大学入試問題を解くことを主目的としたものではなく、各教科で学んだ事柄を総合する能力と態度及び、各教科で学んでいる個別的知識がどう使われるかを知ることによってそれを学習し獲得する意義を理解していく力にある。

1 総合学習を選択した生徒達

総合学習選択の動機は消極的なものが多い。「単位が楽に取れそう」「定期試験が無さそう」(実際はある)。「数学や英語はいやだし他にとるものがない」勿論、「おもしろそうだ」「生命についてというテーマが気に入った」という積極的動機で選択したものも居るが、少数である。

その成績は、毎年1～2名の成績上位者もいるが、その殆どは下位者である。要するにこの総合学習の授業には、受験という動機付けだけでは授業に乗れない生徒達が、多少の救いを期待してはいるが、しかたなくやってくるのである。普通の授業ではやる気の出なかった生徒の集まりである。

2 授業の概略

総合学習が、高校三年生の文系選択科目として、教官会議で開講が認められてから、1993年4月で8年目を迎える。その間、毎年の受講生が10数人と少なく、チームティーチングということで教師を同時に2人付けることもあいまって、本校の少ない教官数では贅沢であり開講同意が得られにくく、開講の断念を迫られるときもあったが、多くの同僚の支えにより続ける事が出来た。

この総合学習の授業は、およそ次のように展開されてきた。

1学期の最初の2～3時間は、ガイダンスとして、生徒には受講の動機やこの授業への期待を語ってもらい、教師からは、開講の理由や大テーマ“生命について”設定の理由を説明したりする。さらに、毎年この授業を受けた生徒達が残す報告集をもとに、過去の生徒の学び具合を語ったりする。次に、生命について具体的にどんなことを学びたいか、生徒の希望を聞く。

このような準備を終えて、1学期の授業の大部分は、大テーマ“生命について”を学んでいく上で参考になると教師が考えたことや生徒からの希望が強かったテーマについて、教師が問題を提起し、それを全員が討論をする形で進められる。時には生徒自身が、生命に関連して日頃考えていることや調べたことを語った年もあった。

また、授業をする教師は、常時は担当の徳井・田中の2人で行うが、都合がつけば総合学習研究グループのメンバーが随時担当することもあった。

過去7年間の1学期に扱った、生命に関連した小テーマの主なものは資料1に載せておいた。

2学期は、1学期の学習をうけて生徒各自が小テーマを自主設定し自学自習をする。その後その成果を順次発表していく。これが、此の総合学習の中心的学習形態である。

第2学期に生徒が自ら選んだテーマの主なものを資料2に載せておいた。

3学期は、実質3週間しかなく、2学期の補充と反省会を行う。

3 総合学習はどういう学力を目指しているか

1学期の授業では総合的に考えるとどんな事かを教師が自ら実践して見せることになる。また、生徒同士が討論することにより生徒も総合的に物事を考えることを実践することになる。2学期では、小テーマに基づいて、生徒が主体的に調査研究する。ここでは自学自習の力を育成する。この自学自習の力こそ総合学習の目指す学力の一つである。

学力、基礎学力はどんなものかは、それが論議される時代背景とその測定方法とに大きく左右される。情報社会における基礎学力は何かという命題を立てるならば、その1つは、当然、沢山の情報の中から自分が必要とする情報を集め、それを総合的に再構築する力だと言える。そして更にそれを分かりやすく発表する事ができればより素晴らしい学力と言える。

例えば、原子力の利用の問題を取り上げた場合を考えてみよう。

基礎的な知識としての原子力エネルギー利用の根底にあるアインシュタインの公式、原子力発電の方式や、放射能と人体の関係や、核廃棄物処理の現状についての初歩的な知識をもとにし、核兵器、原子力発電所の事故、原子炉の廃棄問題、放射性廃棄物の海洋投棄、プルトニウムの蓄積など現在問題になっている軍事的、経済的、社会的、政治的事柄についても調べる。その上で原子力の利用について高校生なりの見解を作る。

ここでは分野別の情報を集めそれを総合して1つの考えを纏めることをすることになる。

自分の見解を持つことが出来、それをクラスメイトなど仲間うまく説明できれば、将来例えば原発の是非を考える上での基礎的学力が身に付いたと言える。更に、エネルギー問題をめぐって自分の生活態度がほんの少しでも変われば実践力のある素晴らしい学力が身に付いたと言えよう。総合学習が目標とする学力とはこの様なものであり、これは、情報化社会に必要とされる基礎学力の1つという事ができる。

物理や生物学の基礎的な知識もおぼつかない生徒ではその様な内容の学習は砂上の楼閣であるという考えもある。しかし、原発の是非を考えるにはその様な物理や生物学に関連した基礎知識を総合する能力が必要であるが故に、1つのテーマに取り組むことにより何事を理解するにもその基礎となる知識が必要だということだけでも分かれば、高卒程度の基礎学力の一部は付いたと考えてよい。

現在の教科書の学習でも上で述べた個々の知識はそれぞれの教科で扱ってはいるが、それを、特定の1つ

の問題に向けて総動員していく力や態度の育成に欠けるものがある。世の中の実際問題とどのようなつながりがあるのか分かりにくいことが多い。物理の授業では政治的な問題との関連は考えさせていないし、社会科の授業では理科で習った事柄との関連を考える訓練はほとんどされていないのが実情である。そのため、教科学習の動機付けが弱くなっている。またそのほかに、筆者の中学技術科での授業経験では、生徒に次のような硬い心理状態が生まれている事がみられる。生徒の製作中の“動くおもちゃ”で使われている減速ギヤボックスのギヤ比の計算をさせたところ簡単な分数のかけ算なのに、生徒曰く「技術の時間に数学で習ったことを使う気にならない、頭が働かない」と。これは教科至上主義の教育が生み出した心理状態である。

普通に行われている教科至上主義のもとでの授業では、最近問題になっているエイズ対策の教育も行いにくい。総合学習の観点から言うならば、エイズ対策教育は、生体の免疫機構やウイルスなど、生命に関する生物学的知識と正しい性徳徳のあり方を含めた社会倫理に関することを総合学習の形態で行うべきである。

Ⅲ 総合学習を選択した生徒の「学力」

前助のごとく、この総合学習を受講した生徒は、国語、数学、英語といった教科毎の定期試験で測定された「学力」は、平均して低い。

では、総合学習の観点から測定された学力はどうかを見てみよう。

1992年度の1学期に教師側からエイズに関する問題提起がなされたのを受けて、たまたま、一人の女生徒が2学期にエイズ問題を研究テーマに選んだ。その生徒の報告書を見てみよう。

表題は「AIDSに対する人々の態度」とある。まず日本とオーストラリアの様子を新聞記事を使って紹介している。エイズウイルスは感染力が弱く普通の生活では知らぬ間に感染することはなく、HIVを持った精液や血液に接触しないように気を付ければ良いとしている。更に、クラスメイトを対象にしたエイズに関する意識調査の結果を載せている。最後に世界のAIDSに対する偏見・差別の様子を載せて終わっている。

この様な調査研究により、この生徒は、エイズ患者への差別感が少し減ったといっている。

生物学的な深さはあまりないが、必要な情報を集めようとしている。また、差別の問題に目を付け、クラスメイトの意識を探ろうとしている行動力が注目される。

さらに、1990年度～1992年度の報告集から生徒がこの総合学習の授業から得たとしているものを見てみよう。

う。以下はその抜粋である。

1990年度

A. Kさん 自分自身の思考の深まりとこれからのこと

私はこれから大人になっていく上で心にとめていきたいのは、自分の周りの事（人や自然）に、気を配りながら暮らしたいということです。どんな変化をしていっているのかを、見ていくのです。

大学に行って学ぶことは、コンピューターを使った、人間の心理学などですが、それを通して、自然と人間の関係を考えていければいいとおもっています。

N. Sさん 総合学習の授業をおえて

地球温暖化について考えたのははじめてだったと思う……中略……家庭内からの排熱の代表的なものは、クーラーの利用だった。早い話がクーラーの使用を一人でも多くの人が止めれば少しずつが大気への悪影響はゆっくりになると分かっているけど実際、頭の中で考えていることを行動に移すことは難しく「他人がやれば自分も……」と考えてしまう。……中略……たった1年間だったけど、何10年経って同じ様な問題を考えた時少しでもこの授業での内容が役に立ったらいいなと思う。

Y. Yさん 総合学習 1年を振り返って

脳死、人権、薬品……特に環境問題の話をしたときに、私はかなり遅れているのだなと真っ先に感じました。ゆらゆらと経過した17年間で、とても悔やまれる思いでした。それからは新聞・雑誌・テレビなどを見ても授業で取り上げてきた言葉が目についてきてかなり知識が増えてきました。人間の世界で様々な人間の問題が次々と出てきて、それを人間同士が解決して行く。自分も元気に生きているからにはこれらの問題に飛び込まざるを得ない。

M. Y君 生命について

人間の生命に付いて昔は深く考えたことはなかったが、総合学習の授業を受けてからは深く考えるようになった。物事はそんなに簡単じゃないと考えさせられて、自分の思考により刺激を与えられた。思考を深める重要性がわかった。これからも、物事を安易に考えず、しっかり考えて行きたいと思う。

K. E君 1年間総合学習の授業をうけて

大学に入ってなにをして、卒業してなにをするのか。それが決っていないのに大学に行くことばかり考えていたのでは、勉強にも身が入りにくいと思います。みんなはもっと目標を立てるべきです。それもないのに大学の為の勉強をするよりも、目標を見つけるために「総合学習」という時間を使って欲しかった。

T. Iさん 総合学習から

……私は、考えを出さないといったが、それは考え

ないことではなく考えて考えて考え抜いていろいろな意見を理解して妥協しつつ一つ一つの問題に当たるべきだと思う。脳死にしる死刑にしるケースによって結果が異なるのは当たり前だ。それによってまた議論が生まれるだろう。これが正しいと唯一絶対の正義を造って合法化でもしてしまえば皆それに付いて安心して、考えることを放棄し、とんでもない方向にエスカレートしていくのではないか。生命に付いて、いや、他のどんな問題に付いても一つの解答に安心して、考えることを止めてはならないのだ。

M. Kさん 総合学習を選択してから

この授業を選択してから、私は大きく変わりました。以前は本当に興味のあるものにしか目を向けなかったのですが、今は自分のできる限りの事に興味を持ち、それに対して「自分は何が出来るか」まで考えられるようになりました。これからは目に見える形で実行して行きたいと思います。

1991年度

E. T君

人間と言うのは地球的規模で考えると、もう殆どろくな事をしていないということだ。これは今から生きていく上でとても大きな事だと思う。人間側からみて進歩と言うことは、どんどん問題が山積して行くことだ。

H. W君 脳死について

近年、脳死問題などで“生命”とは一体何なのか改めて考え直されています。具体的には、脳死の人間は“生命”があると言えるのかと言うようなことです。

脳死と言うのは、小さな子供であれば回復の可能性はあるけど大人で回復するのは殆ど無いと言うことです。

意識がなく機械に頼らなければすぐにでも死んでしまい、その上回復の見込みも殆ど無いような状態で、家族や医者はそれを人間として扱うべきかどうかを悩むと思います。それに、脳死患者の臓器を移植すれば死なずにすむと言う人もいます。その人にとって、ただ機械によって心臓を動かされているような患者より、臓器移植さえすれば普通の人たちと同じように日常生活を過ごせるかも知れない自分達を、より優先的に扱って貰いたいものだと思うのは当然だと思います。

多数の為に少数を殺してもよい、と言う考え方に必ずしも賛成するわけではないけれど、少数の側が既に死んでいるとするなら、問題はないはずです。

もし何年かして脳死が認められたら、今まで移植する臓器がないと言うことで死んでしまった人たちの遺族は、とても無念だと思います。だからこれからもそう言う人たちを増やしてはいけないと思います。

T. Aさん 総合学習について

私は、人間の生命ではなく動物の生命に付いて調べただけと、動物の生命も人間が握っていると思いました。地球をよごすことで、外の生命をも滅ぼしてしまい、これから人間はどうしたらいいのか考えさせられました。

また将来子供を産んだときにもっと生命の大切さが実感できると思うし、もっと考えられると思う。

H. S君 本当の勉強の総合学習

自分自身は脳死に関連したことを調べたが、自分なりの死の基準を設けることが出来た。この授業が無かったらおそらくこんな基準を考えることはなかっただろう。

T. H君 地球環境について

地球がこれほど汚い状態にあるとは知らなかった。そして私みたいに知らない人が世界中にはたくさんいるだろう。科学的解決策も勿論必要だが、それよりもさきに現状を世界の人知ってもらうことが必要だと思う。

これらの生徒の文章を見ると、ある問題について広く総合的に物事を見ようとする立場や、自分なりに解決策を考えようとする態度が少しではあるが身に付いていることがうかがえる。卒業後もこの様な態度が続けば総合学習の目指す基礎学力が付いたといえる。

Ⅳ 評価方法

1 総合学習の成績評価

定期試験の問題は、次に示すような小論文形式で答えさせるものと教師や仲間の発表した小テーマ（資料1参照）の内容に対する感想を書かせるものとのである。定期試験の内、小論文形式の物を1988年度の例に見てみよう。

次のようなテーマ群の中から2つを選んで答えさせた。

- ①原子力の利用が地球上の生命にとって危険ではないようすすめるには、どういう事柄が必要か。その利用の賛否も含めて述べなさい。
- ②次の文章は、旧日本軍の憲兵伍長の1人として中国侵略の戦闘に参加した現在70歳近い人の告白の一部です。これを読んで、生命尊重の思想をどうしたら貫くことが出来るかを述べなさい。（参照文省略）
- ③もし君が今悩みごとを持っているなら、それはどのような種類の悩みで、どのような悩み方をしており、その悩みは君が生きていく上で、どういう意味を持つと考えているかを述べなさい。
- ④たばこ、酒、シンナー等中毒現象が若者や大人にみられますが、どうしてそう言う刺激物の虜に

なってしまうのか、君の考えを述べなさい。

⑤性、生殖、愛これらの関係を考慮に入れて君にとって望ましい人間の性のあり方を述べなさい。

⑥北京で、ダウン症等障害児の捨子が増加していると言う中国からの報道がありますが、効率重視にともなう価値観の変化と障害者への差別感との関連に付いて述べなさい。(参照文省略)

⑦下の文は(省略)作家黒井千秋が1986年5月11日付の朝日新聞に書いて載せた文の一部である。この中に出てくる「娘」の生き方に付いて感想を述べなさい。

⑧君にとって生き生きと生きるとはどんな状態ですか。具体的に述べなさい。

回答の一部を紹介する。

H.Tさん ⑤⑥に対して

障害者が生まれたからと言って捨ててしまう親がいることは大変怒れることです。自分の子供が可愛くないのかなあ。自分が結婚した相手との子供を捨ててしまうと言う、女としての所にも疑問がわきます。障害児だから、健康な子だからと分けて考えるところも変なことだと思います。親はあくまで親なんだし、子は子なんだから。

無責任な子育て、生殖は、無責任な大人を作り、無責任な社会を作ると思います。障害児でも、きちんと教育すれば、社会の鼻つまみ者に絶対ならないと思います。台湾での聾啞者はほとんどが美術家になるそうです。美術家としてやって貰うには、大学での資格があるので、ちゃんと大学も出るそうです。肢体不自由の人もなんらかの方法で人に役立つことが出来ると思います。そうした仕事を身に付けさせることをしないで、産んでは捨て産んでは捨てをしていたら進歩がありません。障害がある子供が産まれてくるのがいやだったら初めからしなければ良いと思います。ちょっと過激ですが生殖する資格のない人間はするべきではないと思います。自分達だけの欲望だけでなくもっと人間性を見極めて行動すべきだと思います。

S.K君 ⑥について

ダウン症や障害児に付いて考えると、自分自身にそう言う事が起こったら、人口中絶させると思う。なぜなら世の中が効率重視の価値観で成り立っているからだ。よく世の中は平等に出来ていると言われるがそれは“うそ”であると思う。人間は高度な文明を持った動物である。その本来の動物の社会は、弱肉強食である。強いものが勝つのである。だから人間はこの事を忘れてはいけないのである。人間全てが平等ではない。能力によって差が出る。この様なことをわきまえて考えると、ダウン症や障害児の子を産むことはできない。自分としては人口中絶させる。中略 愛とか性とか生

殖と言うものは、生命活動として子を作ることなので重大な意味を持っていると思う。でもその重大な意味に人間の科学を使ってはいけけないのだろうか。愛という物は人間の感情の物だからなんとも言えないけれど、人間の性というものは、感情だけですまされないものがある。人間と(産科)科学を無理して切りはなさないほうが良い。

Y.K君 ①について

先日、あるアメリカの原子力発電所が1ドルで売られたという話を聞いた。当然の事ながらたったの130円という価値でなく、その後の管理維持・処分に莫大な費用がかかるだろう。

またある時、スウェーデンの議会が原発をなくすことを決議したというニュースが新聞に小さく載っていたが、この様な勇断は大きく報道すべきだ。何故大きく報道されないのか、それは現在の日本の原発に対する考え方が一部自治体住民団体を例外として、概ね肯定的或は無関心であるからだと思う。

原子力は絶対安全であろうはずがない。何10年か前、事故の起こる原子炉1基あたりの確率は何万分の1とかと計算されていたのだが、今では、配管パイプ破裂による放射能漏れなど、珍獣の発見より確率が高いではないか。放射能は、知らないうちに人間や生物に対して逆らうことのできない害を必ず及ぼす恐ろしいものである以上、放射能漏れの頻発する現在、スウェーデンのようにこれ以上原発を作らない。或は、原発からこれいじょう放射能が漏れないように一層管理に費用を当てなければいけない。安全を主張し推進するのは皆、原発の事故の事を考えているのだろうか。事故が“万一”というもので無くなった以上、細心の注意がなくては、核兵器よりも悲惨な結末になるかも知れない。

Y.Dさん ②について

老人の告白を読んで私は言葉にならない程のショックをたった今受けています。

この告白を本当にあったことだと信じたくありませんけど、本当にあったことなんだろう。いくら戦時中だったとはいえこの様なことがまかり通るなんてなんたる世の中だったんでしょ。彼らは人間という意識、生きていると言う意識を持っていたんでしょか。

私が思うに、この上官らは、百姓が怪しいものでないぐらひは分かっていたんだと思う。彼らはもしかすると“たのしみ”の1つとして拷問を行っていたのではないか。私は考えただけでもぞっとすることを書いてます。しかし、この老人は告白しています。「もう人を見たら殺したい。拷問したい。それをせなんだらご飯がもうないというほどだ」私はこの文章を見たときああ彼らは拷問を一種の“楽しみ”と考えているの

だなど確信しました。

なんて恐ろしいことなのでしょう。生きているものを生きていると思わず、人間を人間と思わず。人間ってもしかしたら、残忍になりたがる本能のようなものを生まれながらに持っているのかも知れない。そう思いました。

老人は、今は、初めて殺した人と同じ百姓をやっているとの事。そしていつも彼の事を気の毒がっているとか。この様なことを淡々と話す普通の人を、殺人を楽しむようにまでさせたのは何だったのでしょうか。人間の潜在的本能と言うことはさておいて、その代表と言えるものの一つに“戦争”というものがあります。これこそ「生命尊重」の思想をガラガラと崩れさすものの根元です。戦争という非常事態になったとき、老人の告白からも感じられましたが、一人の感情・思想といったものは大きな国家の前には歯がたちません。いくら自分には「生命尊重の思想があるから」と言ってもすでに通用しないものになっている。だからこそ私達は戦争という状態を、そうなる前に食に止めていかなければならないと思う。世の中の動きをじっと見つめていなければならぬと思う。私の理想で言えば、生命尊重の為にあらゆる武器と言うものを無くせば良いのと思う。戦争したいときにはじゃんけんでもして。

これらを見ると、生徒達は、物事を多方面からみたり、その根元を掴み取ろうとしていることがうかがえる。この様な出題方法によって、筆者ら授業をした出題者の意図に生徒がどの程度応えているかを見ることが出来る。

1989年度の問題例を資料3に示す。

2 評価の仕方

まず、担当教師二人が、定期試験の評価と日頃の授業態度を考慮に入れて個々に評定を出す。次に、2人の合議で1つの最終評定が決まる。

基礎知識及びそれを総合する能力は上述のような定期試験問題の小論文で評価することになる。

小論文の評価は、論旨が通っているか、基礎的な知識が使われているか、自分なりの主張が根拠を示してなされているか等の点を総合して見る。

2学期の自学自習の成果、即ち、生徒が自ら選んだ小テーマに基づく報告書の評価も同じ様におこなわれる。これが学年評定の中で大きな比重を占める。

日頃の授業態度の評価はどう行われるか。発表能力や聞く態度を、日頃の授業での発言の様子や他人の発表に付いての感想文などを見て、総合的に判定し評定する。討論の司会は生徒の順番制になっているのでその司会の仕方も評価の対象にしている。これらの評価は、指導教師の学期或是一年を通じての印象で決まる。

総合学習での評価はまさに総合評価であり、前述のごとく定期試験や報告書の評価だけでなく日頃の授業態度も考慮に入れてなされたものである。この様な評価方法は、沢山の小問を出しその正解数を加算して、100点とか58点というように数量化された評定と比べると、いろいろな要素が加味される代わりに、曖昧さがある。此の、曖昧さは人の能力の評価にそぐわないものでは決してない、人間は本来曖昧で多様な能力を持っているのであって、たまたま一面的な数量化しやすい測定方法によって、能力が点数化されれば、あたかもハッキリした能力であるように見えるだけである。

3 評価の実態

本校の内規によって5、4、3、2、1と評定を付けることになっているが、総合学習では、学習者が十数人と少なく、教師との間が直接的で目が良くゆきとどくためか比較的良い評定が付く。また2人の合議制なので差が無くなっていく傾向にある。例えば全員4を付けたい時などがある。これでは、大学入試の内申書用に作られた評定平均値の内部申し合わせに合わなくなる事が多く、ムリに「差」を付けている時もある。

4 総合的評価とは

前述のような総合学習における評価方法は、次のごとき特徴を持っていると言える。

1人の生徒を全面的にみて評価する。基礎知識、其れらを課題解決に向けて再構築する力、人の話を良く聞く態度、自分の考えを発表する力などを総合的に評価する。評価の方法も、生徒を全面的にみる事の出来る方法を取る。この方法の特徴は、態度、発表力など筆記試験では数量化しにくい項目を入れるため、気を付けないと教師の主観が入りやすいことと、全生徒を討論に引き入れ喋る機会を多くするなど、生徒を行動の中でみるため少数教育にする必要がある事などである。評価は何の為に、誰の為にするのかを考え直すという原点に立てば、この方法は総合学習にふさわしい正に総合的全面的評価になっている。また、前述のように此の授業はチームティ칭ングで行っているので、評価も2人の教師の合議でしている。このことは、主観的评价になることを少なからず防いでいる。

評価は誰の為にするのか。評価は本来学習者と教授者の為にある。学校の外部に対して出される内申書の為にあるのではない。周知のごとく内申書は学校や会社が、入れる者を選別するのに使われる。

学校での評価が外部に出されそれによって進路先が決まれば、教師の主観・価値観が評価に入っては不公平だという説が成立する。学習態度とか、発表能力、意欲関心などは、教師の恣意が入りやすく、数量化し

にくいので評価の項目に入れるべきではなく、その様な不公平感や曖昧さをあたかもはっきりとした点数で隠ぺいしてくれると思われる客観テストによる機械的評価がよしとされる。この様な事情で、通常、数量化しにくい事柄は評価の項目から消され易い。現在、義務教育段階では、生徒を全面的に評価しようということで態度、意欲、関心等を評価の観点として積極的に登場させてきている。しかし、内申書が学校の外に出されるといふ事がある限りは問題がすり変わったにすぎない。

態度関心意欲などを個別に評価する為に教育内容を規定したり、試験問題を考えるのは、評価の為の評価となって本末転倒である。これらは主に生徒の行動の中に現れるものである。従って、この総合学習のように、討論や自学自習、発表と言った多様な学習形態を採らなければ見ることのできないものである。しかし、これは、詰め込み型学習を是とする立場からは、冗長度の多い学習形態という事になる。総合学習的立場での授業をしなければ意味のある総合的評価はできない。

5 授業の評価の為の評価

評価の本来の意味のもう一つは教授者の自己評価の為にある。即ち授業の評価である。生徒の態度意欲関心を評価して、「あなたの態度が良くない」とか、「関心の程度が薄い」とか「意欲がない」等と評価して終りではいけない。意欲や関心が湧かない生徒がどれだけいてその生徒をどうするのか、どうしたら積極的な授業態度にすることが出来るのかなど、むしろこれは教授者に今後の指針を与える為のものと考えべきである。上述のように外部に出す内申書の為の評価という立場から、「態度関心興味意欲」などを評価しても意味は薄い。

なお、授業の評価は生徒の感想やアンケート調査でも可能であるが、資料4に、試験問題と調査を兼ねたものを挙げておく。

V まとめ

1993年4月で8年目にはいる総合学習“生命について”の目指す学習内容はその当初から、次のようなものであった。(注：名古屋大学教育学部附属中・高等学校紀要第32集 1987 p33 総合学習「生命について」の授業実践のまとめと今後の課題を参照)

- ① 自分と他人の生命を尊重することの重要性を知ること
- ② 生命を脅かすものの実態を知ること
その目指す学力は
- ① 生命に関連した事柄についての問題点を総合的に把握できること

- ② 生命に関わる問題点の解決に向けて、総合的に思考できること
- ③ 学んだ事を、他者に発表したり実践できること
- ④ 生命に関連した事柄に関心を持ち、学習の意義を理解し、将来にわたって学習意欲を持ち続けること
- ⑤ 自学自習の力がつくこと

これらの指標は、授業が旨くいっているかどうかをみる指標でもあることはいままでのない。

その評価の方法及び真の多面的総合評価を生むための条件は、

- ① 小論文形式の筆記試験と授業中での、討論、発表、司会、聞く態度や自学自習による課題研究の成果などを総合的に評価する。
- ② 討論、自主研究、発表といった生徒を主体とする授業の展開に留意
- ③ 複数の教師による授業と評価、生徒一人一人を良くみるための少人数教育
- ④ 学校に於ける諸活動を教育の観点から総合的に捉えようとする教育の総合化(注：名古屋大学教育学部附属中・高等学校紀要 第36集 1991 p95「平和教育としての総合学習の実践(その2)」の中に平和教育の観点からの“教育の総合化”についての筆者の記述があるので参照されたい。)の追求がなされること。
- ⑤ 評価が生徒の選別ではなく生徒と教師の進歩の為になされるという評価の正しい使われ方

資料1 第一学期の問題提起のための小テーマ

- (1) 生命観に関するもの
(1986年～1988年)
生命の誕生(生物学の立場、宗教・神話の立場)
生命の思想史
老化について
死刑制度について
(1989年～1992年)
生命について
生と死
死について
仏教の生命観(生徒発表)
歴史的生命観と重層的生命観
- (2) 生命を取り巻く状況に関するもの
(1986年～1988年)
生命を脅かすもの(戦争・公害等)
人口論・食糧問題
ベトナム・ドク君
異常児・障害児の命
チェルノブイリ・クライシス

| | |
|-----------------------------------|---------------------------------------|
| 核エネルギーの利用と生命 (1989年～1992年) | (1989年～1992年) |
| 人類の繁栄と環境破壊 | 臓器移植 (生徒発表) |
| 原子力について (生徒発表) | 脳死 |
| 人間にとって自然とは | バイオテクノロジー |
| 生命を脅かすものと性 | バイオエシックス |
| アルミ缶回収について (生徒発表) | 人口臓器について |
| 原子力発電 | 脳死・肝移植 |
| 戦争と平和 | 生命の質をめぐって |
| 生命を脅かすもの | デカルトについて |
| 人間にとって自然とは | 731部隊 |
| 人間を育む地球環境の変化 | 産科医療技術の発達と生命 |
| 過疎と原子力 | |
| 水俣病について | 注：1990年1学期はテキスト「食と生」を使う |
| エイズについて | |
| ゴミ問題 | |
| (3) 人間の生き方に関するもの (1986年～1988年) | 資料2 第二学期に生徒が調査研究したテーマの主なもの |
| 言葉について (失語症) | (1) 生命観に関するもの (1986年～1988年) |
| 自殺と殺人 | 生命の思想史 |
| 生命と労働 | 昔の偉い人の生命観 |
| 遊びについて | 宗教と生命観 |
| 生命のリズム | 死刑廃止論 |
| 人間の生命とは | (1989年～1992年) |
| 非行と犯罪 | アウシュビッツについて |
| 精神病理 | 連続幼女誘拐殺人事件について |
| 麻薬・シンナー・タバコ | 生と死 |
| 愛と性 | 生命と死について |
| 差別について | 安楽死の事に関する中間報告 |
| 生きるとは | 宗教と人間 |
| (1989年～1992年) | ころ |
| 生命のリズム | 葬送と死生観 |
| 差別について (生徒発表) | (2) 生命を取り巻く状況に関するもの (1986年～1988年) |
| 沖縄とアイヌと差別 (生徒発表) | 人間の営みと自然破壊 (核エネルギー問題及び 大気汚染・水質汚濁等) |
| 宮崎勤事件 | 日本の食糧問題 |
| たばこ・シンナー (生徒発表) | 胎児の障害 |
| 愛と性 (生徒発表) | タバコが人間に与える害 |
| 自殺について (生徒発表) | 21世紀と人類 |
| 子供の人権と学校 | 核エネルギーと生命 |
| 子供の人権宣言 | (1989年～1992年) |
| 校則問題 | フロンカスの生物への影響 |
| アイデンティティ | フロンカスによるオゾン層破壊 |
| (4) 生命倫理に関するもの (1986年～1988年) | フロンカスと地球の温暖化 |
| 遺伝子操作 | フロンカスの性質と利用方法 |
| 胎児診断 | 森林破壊 |
| 脳死と臓器移植 | マングローフの危機 |
| バイオエシックスをめぐって | |

チェルノブイリの原発事故の放射能で汚染された食糧とそれを食べる人間への影響

環境問題

ゴミ問題

原発問題

食品の安全性

薬の害

地球の温暖化

地球の未来

森がなくなり魚が消える

地球環境と人間

名古屋市高速道路「高速1号線と鏡ヶ池線」問題

タバコについて

発ガン物質

エイズに対する人々の態度

(3) 人間の生き方に関するもの

(1986年～1988年)

中高年の心理

幼児の心理

心の悩み

心について (自分史)

殺人

遊び

失語症

老人ホーム

「無意識」について

ガン、その告知について

文学者にみる狂気と絶望感

青年の無気力について

刺激を求める世代

(1989年～1992年)

遊びについて

精神病について

生きていることについて

学歴社会

過労死とその背後にある日本の労働環境

人口問題

リサイクル

アメリカにおける表現の自由

(4) 生命倫理に関するもの

(1986年～1988年)

代理母について

脳死の判定基準と世論

脳死と臓器移植

脳死について

バイオとエシケイ～バイオエシックス～

(1989年～1992年)

代理母について

脳死について

死刑制度

産科医療技術の発達と問題について

人間の存在価値と死～老人問題～

ボクシングは廃止すべきか

本当にくじらは捕るべきではないのか

太平洋戦争・ベトナム戦争における、主に兵士の行動から人間や生命について考える

脳死

臓器移植

脳死と臓器移植

人口中絶

従軍慰安婦と女子勤労挺身隊について

ターミナルケア

資料3 総合学習の定期テスト問題

1989年度の例

1 試験管ベビーについてのやや専門的文章を読ませて次のような出題をした。

① 試験管ベビーという産科医療技術の発展推進の是非について、君の意見を述べなさい。

② 生まれる前の胎児の性別や奇形の有無を調べる技術の普及推進の是非に付いて君の意見を述べなさい。

2 次のような質問に簡単に答えさせた。

○フロンガスがオゾン層を破壊する理由は何か。

○タイでマングローブの林が危機に瀕している理由を3つ指摘しなさい。

○チェルノブイリ原発事故による放射能汚染でラップ人への被害が心配される理由を述べなさい。

○副流煙とは何か

○老化を「細胞の突然変異」説で割り切ることが出来ないのはなぜか

○「憑依」の読み方と意味を書きなさい

資料4

総合学習の授業をうけてどんな事に関心を持つようになったかを定期テストの中で尋ねた。これは、生徒を評価すると同時に授業の評価にもなる。

1993年1月の定期テストにて、生命の尊厳という立場から「もっとも気になる最近の出来事は何ですか」という質問をした。受講生が挙げた事柄(1人5つ列挙)の内上位8位までは次のごとし。

エイズ

動物の生命軽視

米国での日本人留学生射殺事件

地球温暖化など環境問題

プルトニウム輸送など核エネルギー利用にともなう放射線などの危険について

臓器移植

人口問題

ただ一人しか挙げなかった多くのその他の項目を入れると、生徒の関心事は授業で扱った事柄を越えて多岐に渡っている事が分かった。このことから此のテスト問題への生徒の回答は、生徒には広い視野を持つ下

地作りが出来ていると捉える事の出来る1つの証拠を提供してくれているといえる。

参考文献

- ① 名古屋大学教育学部附属中・高等学校紀要 第32集(1987)～37集(1992)の総合学習関連論文
- ② 広岡亮蔵 教育学著作集Ⅰ 学力論 明治図書 1975